

林訳小説《紅篋記》などの原作（下）

渡辺浩司

2 - 補

前稿「林訳小説《紅篋記》などの原作（上）」（以下、「上」と略称する）発表後、Headon Hill 『Seaward for the Foe』所収の短篇が、《小説月報》の他の号にも翻訳掲載されていることに気付いた。以下の3篇である。

「 The Key of the Mine Shed 」

- 《林肯救國》【原著者名無】《小説月報》7-3,1916.3.25

「 The Lens of the Search-Light 」

- 《探海燈》【原著者名無】《小説月報》8-1,1917.1.25

「 How Ella Rhys Stopped the Coal Strike 」

- 《煤礦罷工》【原著者名無】《小説月報》7-10,1916.10.25

原作の順番と合わなくなるが、「上」に合わせて翻訳発表順に言及する。

2 - 補1 《林肯救國》

くり返すが、原作は、『Seaward for the Foe』 「 The Key of the Mine Shed 」である。あらすじを紹介する。

Portland の海沿いの採石場では、夏の午後、囚人たちが作業していた。戦争が始まって2週間、看守たちの会話から、断片的ではあったが、彼らもそのニュースを聞いていた。

囚人の中に、Lincoln Guthrie という男がいた。彼は秘密裏に入手した恋人 Alice からの脱走ルートを知らせる手紙を持ち、周囲の状況をうかがっていた。その時、

沖合で海戦らしき黒煙が上がった。看守らがそちらに気を取られた時、Guthrie は脱走した。逃げる道は、刑務所に入る前に何度も来たことがあり、彼はそこで工兵隊軍曹の娘である Alice Page に告白したのだった。追っ手をやり過ごすために待っている間、彼は有罪判決を受けた事件のことを思い出す；Weymouth の一流ホテルの簿記係だったが、客室で10ポンドと Fairfax 卿の紋章入りの金の煙草入れの盗難があり、フランス人料理人 Félix Ravigny の目撃証言とたまたま10ポンドを持っていたことから、自分是有罪にされた、そのフランス人は Page 軍曹の娘(Alice)に言い寄っていたが、目的は女性ではなく、軍曹の軍事情報ではないかと思っていた。

追っ手が見えなくなると、再び動き出し、近くの農民にも気付かれず、Alice が待つ場所にたどり着いた。2人は更に進み、機雷基地に着いた。そこは Guthrie も知らない所で、煙突も窓も無く、海側にドアがあるだけの見つけにくい黒塗りの堅固な建物だった。普段は Page 軍曹が管理し、ドアの鍵を石の下に隠していた。Alice はそれを知り、今回の脱走に使ったのだった。2人は中に入り、Guthrie は Alice の用意した服に着替え、短髪を隠すために帽子をかぶった。少し余裕ができた Guthrie は戦況について尋ねた。そして脱走前の沖合の黒煙を思い出し、ここにいるのはまずいのではと思った。その時、部屋の隅で何かが動いたようで彼は驚いた。彼女に鼠でしょうと言われ、6か月の刑務所暮らしで動揺していると彼は言った。2時間後、彼女が用意した食事をとりながら、Ravigny のことが話に出た。開戦後、父(Page 軍曹)が Ravigny を疑い出したので、最近姿を見なくなったとのことだった。あいつはスパイだと Guthrie が声を荒げた時、大きな砲声が聞こえた。

2人がうろたえて、ここを出なければと後片付けを始めたが、外から足音と「Page 軍曹、速く鍵を」等と言う声がし、少しの沈黙の後、「ありません」等と聞こえた。そして、敵が機雷海域を突破する前に爆破が間に合うようドアを破るボールを持って来られれば、10ギニー出す等と聞こえた。Alice は天井の落とし戸から逃げられるかも知れないと言うが、Guthrie は自分が逃げるために時間を費やすのは敵を利することだと考え、それはできないと答え、ドアを開けた。怒った隊長と6名の兵と対面し、Alice の父以外は、床に置かれた服で Guthrie が囚人であると理解した。Guthrie は自分は囚人で、自分の都合より国の安全を考え、ドアを開けたと言った。隊長は、逃がしてやりたいがそれはできない等と言い、2名の兵に彼を見張らせた。Alice は泣いていたが、Guthrie は作戦遂行を興味深く観察した。太陽は沈んでいたが、周りはまだ明るく、3隻の巡洋艦と6隻の水雷艇が防波堤の間

を進み、港外に停泊する商船に隠れ、陸側の堡壘を攻撃し、陸からの砲撃には軽い損害で済んでいた。

機雷基地では、隊長、軍曹らが配置に着いていた。軍曹が敵艦の位置を確認し、技士がスイッチを押すと、海で水・煙・炎が混ざった、世界の終わりのような状況が起こり、地鳴りのような響きの後、沈黙した。戦果は、巡洋艦2隻と水雷艇4隻が消え、巡洋艦1隻が沈みかけ、水雷艇2隻は逃げつつあった。隊長は戦果を見に外へ出ようとしたが、帆布の山につまづいた。彼はすぐに立ち上がり、この下に誰がいるので引きずり出せと部下に命じた。出てきたのは Ravigny で、彼は Alice が Guthrie を迎えに出た際に、鍵のかかっていないドアから侵入したのだった。隊長が彼を調べさせると、金の煙草入れが見つかった。

その後、Guthrie は刑務所に戻ったが、数日で釈放命令が届いた。Ravigny はホテルでの盗難とスパイの両方を自白した。機雷基地へは、味方の到着前に機雷を爆破する目的で忍び込んだが、Guthrie らが来たので、できなかったのである。このように、イギリスの男が自己の利益より公の繁栄を優先したので、国から賞を受けるほどになったのである。

詳しくは書かれていないので不明だが、海底ケーブルを通じて爆破させる機雷のようである。冤罪を晴らした恋人たちの幸せな話がある一方、機雷で撃沈され、船と運命を共にした数多くの人間がいるという、戦争の狂気が伝わる物語である。

中国語訳について述べる。「 How the ' Vengeur ' Came to Bournemouth」の訳《少尉夏雷尺石忒》が《小説月報》7-4(1916.4.25)に掲載されている。そして、この「 」の訳《林肯救國》が同誌7-3掲載なのである。通読しても意図的とは思えないので、編集者のミスであろう。ただ、「 」冒頭に「Vengeur」に関する記述があり(26頁)、中国語訳では省略されている。ここから林紓らが先に「 」を訳し、「 」に関する記述を省いたとも考えられるが、そもそも省略自体が多いので、やはり「 」の訳が「 」より先に掲載されたのは、《小説月報》編集者が順番を誤ったのだと推測する。

他にも訳されていた場合の参考にできると思うので、主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Lincoln	林肯
Alice	亞利司
Félix	輝立克司
(sergeant) Page	陪子
Portland	波忒蘭得(島)

内容については、省略が多いことが言える。物語には手を加えていないが、冒頭の刑務所内の採石場の場面が特に多く略されている。その書き出しを挙げる。

Up on the sun-blistered rock of Portland the weary “ chink-chink ” of the stone chisels from within the prison inclosure told that the convict gangs were working the afternoon spell in the quarries. In that second week of the war the news that England stood on guard against her enemies had filtered even into those sorrowful precincts ; and many eyes, some fierce and some only sad, turned often from the glaring white stone to the restful blue of the sea below. (26頁)

(太陽が照りつける Portland の岩場で、刑務所の区域内から鑿のカチンカチンという疲れたような音がした、それは囚人らが採石場で午後の作業をしていることを物語っていた。開戦2週目で、イギリスが敵を警戒しているというニュースはこの悲しき所内にさえも漏れ伝わっていた；多くの目、獐猛なものもあり、悲しみだけのものもあった、それらの目は、まばゆい白い石から下の静かな青い海へとしばしば向いていた。)

英法開戦之第二禮拜一日。波忒蘭得島上之牢獄。無數囚人。在其中作苦。此囚固已聞宗國與法人宣戰。心中亦躍躍而動。且作苦。且聞戰事。或怒髮上衝。或目注海上。厥狀不一。(1頁上,句点は原文のまま,以下同)

(イギリスとフランスが開戦して2週目のある日、波忒蘭得島の牢獄で多くの囚人が重労働をしていた。彼らもちろん母国がフランスに宣戦したことを聞いており、心の中では気がやりうずうずしていた。重労働をしながら、戦争の知らせを聞き、髪を逆立てて怒る者もいれば、海上をじっと見つめる者もあり、彼らの様子は様々だった。)

中国の読者にとっては「 」の前提がなく、突然、イギリスとフランスの開戦2週目からなので、理解に苦しんだであろう。細かいことでは、中国語訳には採石場の記述は無い。読者の予備知識に Portland が無いので、訳しても無益だと訳者が考えたのだろう。

2 - 補2 《煤礦罷工》

原作は、『Seaward for the Foe』 「 How Ella Rhys Stopped the Coal Strike 」である。あらすじを紹介する。

Bright Star 炭鉱の夕暮れ時、労働者のリーダーである Robert Llewellyn は演説を始めようとしていた。聴衆の中に、6か月前には結婚まで約束していた Ella Rhys の姿を見て、彼は弱気になっていた。彼女は今、彼の対抗者であり、彼の次に演説する Dave Morgan に心を寄せていた。Dave はこの炭鉱に来て1年あまりだが、最初から先頭に立って経営者と戦い、Robert に代わって労働者側の代弁者になっていた。

Robert は、石炭が無ければ、艦隊が動けず、国が滅びると訴えた。少しの賛同を得たが、聴衆は Dave の演説に期待していた。Dave は、ストライキを続けることを訴え、賄賂をもらって自分たちを誤った方へ向かわせようとしている者がいる等と発言し、暗に Robert を中傷した。Robert は怒って殴りかかろうとしたが、Ella が Morgan に拍手を送り、大声で声援したのを見て、何もしなかった。聴衆の中で、Robert の支持者の1人が、Robert が反論も何もしないのを見て驚きつつも、Morgan にそれを証明しよう言った。Morgan は3日あれば証明すると答え、集会はそれまで延期となった。

Robert が帰る途中、Ella が突然現れた。彼女は、彼を臆病者となじり、あんな言葉を聞いたのに手を出さないとは思わなかったと言った。Robert は、Ella の目の前で彼女の恋人を殴りたくなかったからだ等と答えた。しかし、Ella は、実は Morgan が怖いのだ等と煽った。Robert は、お望みならば Morgan をのしてやると言い、そうしなかったために、更に3日間石炭供給が滞る、誰かのせいでフランス・ロシア側に機会を与えてしまうと答えた。Ella は、もう一度戦う機会があっても同じことをするだろうとあざ笑って立ち去った。

それから Ella は Morgan に会った。Robert をやり込めたことを言い、Morgan は、

約束通り明日いっしょにここを去って、Merthyr で結婚しようと言った。Ella は承知し、今から Morgan の家に行き、前で大騒ぎしてからかかってやろうと提案した。Morgan は少しためらったが、Ella に頼まれて、仲間を集めてくると言った。

1時間後、Robert は家におり、母に今日のことを話していた。母は、Ella の母と付き合いがあり、彼女は、Morgan が転居するようだとか、Ella は Morgan には興味が無いようだ等と話していた。Robert はそれを聞き、即座に否定した。2人の話の途中、家の前で大騒ぎが始まった。

Robert は表に出てお囃子を静めた。そして Morgan に一対一で決着をつけようと提案した。Morgan は Ella に後押しされ、しぶしぶ受け入れた。勝負はすぐに決まり、Morgan は出血し気絶した。Morgan の熱心な支持者はこそこそ逃げ去ったが、他は謝罪と祝辞を Robert に述べた。その中で、Ella が倒れた Morgan の所に行ったので、Robert はいらいらしたが、彼女は介抱せずに Morgan の首の辺りから手紙を抜き取った。その手紙はパリからで、イギリス艦隊への石炭供給を明後日まで妨害すると500ポンド支払うとの内容だった。彼女はそれを Robert に見せ、以前に Morgan がフランスから来た手紙を持っているのを見て疑い始め、そのために Morgan に接近した、しかし手紙を首に結び付けていたので見る機会が無かった、そこで今日の演説会を利用した等と話した。

Ella と Robert の仲は元に戻り、すぐに炭鉱は操業を再開し、石炭は港へ運ばれた。国の繁栄と自分たちの利益のどちらかを選択する時、イギリス国民はいつでも自国のためになることを選ぶのである。

炭鉱ストライキを扱い、それを戦局に合わせるという、戦争文学の広さを感じさせる短篇である。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Robert	老薄忒
Ella	伊拉
Morgan	莫干
Bright Star	明星

内容については、やはり省略が多いことが言える。省略も多く、改訳もある部分を一例挙げておく。最後の決闘の場面である。

At this, Morgan sullenly took off his coat, and, encouraged by a cheer from his warmest supporters, put himself in position to spar up to his opponent. Unless he was going to lay down and grovel on the ground, there was no other course open to him, and to the last moment he watched Robert's face greedily for signs of the forbearance he had shown before that day. Dave was not the man to throw away chances, and Ella Rhys, who ought to know, had told him that this man was cowed.

If so, Robert Llewellyn had a funny way of showing it. He walked up to Dave, disdainful of the latter's theatrical flourishes, and never putting up his hands till he was within reach. Then he set about his business with a grim determination that placed the issue of the fight beyond doubt from the first blow. There were no seconds, no rounds, no time-keeper : it was a case of hammer and tongs till the best man had won, and a quavering cheer from old Mrs.Llewellyn, standing a proud spectator at her cottage door, soon told who that was to be. In less than a minute Morgan fell to the ground stunned and bleeding, from a knock-down blow behind the ear. (192-193頁)

(そこで Morgan は不機嫌そうにコートを脱いだ、自分の一番の支持者からの声援に勇気づけられ、相手と殴り合える所にまで進んだ。かがんで腹ばいにもならないかぎり、彼が出て行く道は無かった、次の瞬間、彼は Robert の顔に少し前に見た辛抱の様子を目ざとく見つけた。Dave(Morgan)は機会を逃すような男ではなかった、そして、相手の男のことをよく知っているはずの Ella Rhys が、自分にこの男が怯えていると教えてくれていた。

仮に怯えていたとすれば、それを示す Robert の動きはおかしなものだった。彼は Dave に歩み寄り、その芝居じみた態度を軽蔑し、手の届く距離になるまで両手を出さなかった。そして、必ず一撃で終わらせるという決意を持って、自分のなすべきことをやったのである。付き人も、ラウンドも、計時係もなかった、最強の男が勝つまでの激しい試合である、母 Llewellyn は小屋のドアの所で誇りを持って見守っていた、そしてその声を震わせての喝采が最強の男がどちらなのかを明らかにした。1分もかからず、耳の後ろへの強烈な一撃で

Morgan は倒れ失神し出血もしていた。)

莫干聞有言激之。即與老薄忒交。莫干者。以爲老薄忒怕己也。決老薄忒必不敢進。而老薄忒雖銳進。然甚審慎。思得其要害而死之。是時並無監史。恣其毆擊。老薄忒乘間。以拳擊其耳後。腦破血溢出。立死於地。(5頁上)

(莫干は声援を聞くと、すぐに老薄忒と向かいあった。莫干は、老薄忒は自分を恐れていると思っており、老薄忒からかかってくることは絶対にはないと思っていた。老薄忒はぐっと前に出ようとしたけれど、慎重になり、この男を殴り殺してしまおうと冷静に考えた。この時は立会人もおらず、好きなだけ戦えた。老薄忒は隙に乗じて、耳の後ろを殴りつけた。頭は割れ血が流れ出し、(莫干はすぐに倒れて死んでしまった。)

原作では Morgan を気絶させただけなのに、中国語訳は殺してしまっている。不必要な改訳に思える。

細かい所では、イギリス艦隊が石炭不足のため停泊している港「Cardiff」が180頁と195頁の2か所に現れる。中国語訳では、前者を“卡底”(2頁上)とし、後者を“卡的夫”(5頁下)としている。やはり固有名詞は首尾一貫させるべきだと思う。

2 - 補3 《探海燈》

原作は、『Seaward for the Foe』 「The Lens of the Search-Light」である。あらすじを紹介する。

フランス・ロシア連合軍による海上からの攻撃に対して、海岸の高台に築かれた砲台と夜襲に備えてのサーチライトのおかげで心配する人はほとんどいなかった。

海峡への西側水路近くの高台のもと、Cawsand に小さな村があり、住民の間では戦争の話はそれほど上っていなかった。その海で、1隻の小型帆船が岬を回ろうと試みており、その不慣れた操船を見ながら、老漁師 Davy Stone と彼の下で働く Ned Springett が話をしていた。そこに、Davy の孫娘 Margery が現れ、2人に助けに行くよう言う。Davy と Margery はお互いに仲が悪く、Ned は、雇い主の Davy には逆らえず、Margery には好かれたいと思っており、2人の間で気を遣っていた。船は浅瀬に乗り上げ、2人が助けに行こうとした所、5人の乗組員はボートで脱出

した。

ボートは海岸に着き、船長 Jan Jansen はなまりのある英語で、オランダの Wilhelmina 号だと言い、海岸のパトロールも身分証により確認した。4人は上陸したが、1人は横になったままだった。その男は他より見劣りする体格で、乗客かと疑われたが、船長はそれを否定し、料理人の Carl Ruyter で、足をケガしていると説明した。その男も同調し、周りを見ながら、足がよくなるまで3日間泊めてくれないかと頼んだ。へつらうような態度だが、顔には時々凶悪な表情が見えたため、誰もすぐには応じず、Margery も Ned に表情が嫌なので受け入れない等と話した。すると、Davy はここぞとばかりに、男を受け入れると言った。Ned が Davy に男の顔つきのことを話すと、Davy は猛烈に、自分に逆らって孫娘の肩を持つなら、Ned を解雇して孫娘には近づかせせないと言い返した。Ned は話題を変え、山側の兵の動きを見ながら、フランス・ロシア軍が近くにいると言われているのは本当のようだ等と言う。Davy は、村を見下ろされ、プライバシーを侵害されているので、嫌っていた。そして、それは作り話だろうが、確かめた方がいいので、深夜、海に出てみると言った。あの男と夜に2人きりにしては、Margery が危険だと Ned が言うと、Davy は笑っただけで、渡し舟の所へ行った。Davy が見えなくなると、Margery が荷物を持って家から出てきて、男がいる間、おばの家に滞在すると言い、去っていった。

Ned が家に入ろうとした時、男のいる部屋から足音が聞こえた。彼は男の部屋に行き、疑いを抱いてそれを話すと、男は否定した。その言葉遣いから、Ned は男がフランス人だと見抜き、男が乗っていた船の不自然な座礁を思い出した。彼は男の目的を探ることにし、数時間部屋に残ったが、男は言葉以外はボ口を出さなかった。そのうち、男が眠りたいと言ったので、Ned は承諾し、家に帰ると言った。男がとても喜んだので、彼はますます疑いを深めた。Ned は家を辞し、裏に行き、男のいる部屋の窓に近づき中をうかがった。男は自分の荷物から、四角い防水布の包みと地図を取り出し、地図をしっかりと見、包みを解き金属製の箱を出した。次に、船の料理人には不似合いの豪華な金時計を取り出し、それを見ながら、箱のハンドルを数回回した。男は箱を包み直すと、履けないはずのブーツを履いた。その時、足音が聞こえたので、男は椅子を持ってドアの陰に隠れた。Davy が入ってきて、部屋が無人なので驚き立ち止まった所、椅子が頭へとふり下ろされた。Ned が大急ぎで裏口から入っていくと、男の姿は無く、Davy も身を起こしつつあった。Ned は

男が残していった地図を見、付けられた印から男の目的がサーチライトだと気付いた。彼は Davy の丈夫な杖を持ち、家を飛び出した。日暮れ時で、もう時間の余裕も無かったが、Ned は地の利を活かし、サーチライトの所まで先回りした。まだライトを管理する兵士もおらず、男も到着していなかった。5分もたたず、男が現れ作業を始めた。Ned はこっそり近づき、杖を男に食らわせた。そして、爆破装置を遠くにやって、兵士らに知らせた。指揮官は Ned を称賛し、敵艦を欺くため、彼らが射程距離内に入るまでライトを消しておこうと言った。敵はまんまと罠にかかった。海峡西に配置されたボートからの知らせで、こっそり進もうとしていた敵艦がサーチライトに照らされ、集中砲火を浴びた。翌朝、海岸に打ち上げられたフランス・ロシア軍艦の残骸の撤去に Cawsand の人々は忙しく従事した。帆船の乗組員は、海上で出くわしたフランスの戦艦に買収され、フランス兵を乗組員として潜り込ませ、指示された航路をとったことを白状し、船長は投獄された。

立場の強くなった Ned は、Margery と教会で結婚式をあげた。来るべきより大きな勝利のためにベルが鳴り響いていた。

結婚できた若い2人の幸せの反対に、この作品も船と共に海に沈んだ数多くの兵がいるのである。当たり前のことであるが、戦争では一方がうまくいけば、もう一方は死人が出るのである。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Ned	尼得
Davy Stone	大衛 司騰
Margery	馬加嫫
Cawsand	考山忒

内容については、やはり省略が多いことが言える。まず、省略と改訳が見られる部分を一例挙げる。爆破装置を仕掛けた男が Ned にのされ、その後サーチライトで勝利を収める場面である。

“ I'll give him a dose of his own medicine, ” said Ned, as he stole from his

hiding-place, and brought old Davy's staff down on his temples with a vigour that nearly cheated the hangman. And then, having removed the infernal machine to a safe distance from the search-light, the young man hastened to the fort with his tidings.

“ You have done your country a rare good turn, my lad, ” said the commanding officer, as he stood a little later over the crumpled heap of humanity for which a stretcher-party had been sent to the shore. “ We'll let the Frenchmen think that their tool has been successful, and not turn on the light till they are within range. ”

Thus it was that on that memorable night the enemy fell into their own trap thanks to Ned Springett having no one to rule him for once. A boat was stationed with rockets at the western approach to the Sound, and not till the fiery herald shot skywards did the search-light stream across the sea, showing the hostile ships stealing for the passage they had thought to find in darkness. Then, and then only, did the guns thunder from the heights, with the result that next morning Cawsand folk were busy picking up French and Russian splinters along the shore. (80頁)

(「奴に薬を一発お見舞いしてやろう。」 Ned は言いながら、隠れていた所からこっそり近づき、老 Davy の杖をこめかみに振り下ろした、あやうく死刑執行人の代わりになるほどの力だった。そして、爆破装置をサーチライトの所から安全な位置にまで移し、急いで高台の部隊へ知らせに行った。

「君は国家のためにすばらしい貢献をした」司令官は言い、担架が海岸に運ばれてくる間、のびた男を少し見張っていた。「我々は、フランス側に奴らの作戦がうまくいったと思わせるため、奴らが射程内に入るまでライトを消しておこう。」

こうして敵が自身の罠にはまった記念すべき夜になった この時だけは誰の下にもつかなかった Ned Springett のおかげだった。のろしを積んだボートが1艘、海峡への西の入口に配置され、烽火の知らせが空に上がった時、サーチライトの光が海へと注がれた、敵艦が暗闇の中、見つけた水路をこっそり進むのがわかったのである。その時、正にその時だけ、砲撃が雷鳴のように高台からとどろいた、結果として、翌朝、Cawsand の人々は海岸でフランスとロシ

アの艦船の破片を拾うのに忙しいほどだった。)

尼得即舉棒力棒其首。創人中腦而死。即置其鐵匣於隱處。立奔赴愬台上之人。官擊衆而下。即曰：“今夕且不然燈。迨敵艦來時。然燈以射之。狙擊尤近。”是夕敵艦果至。且近。立發燈光。衆砲齊發。來艦立沈。(4頁下,コロン・引用符は補った,以下同)

(尼得はすぐに棒を持ち、首めがけて力いっぱい打った。ケガをした男は頭をやられ死んだ。そして(尼得は)鉄の箱を岩陰に置き、急いで高台の兵士に知らせに行っただけだった。)

司令官は兵を伴い下りていき、「今晚はまずライトを消しておき、敵艦がやって来た時に、ライトを照らし砲撃しよう。近づくものから狙い撃ちだ。」

その夜、果たして敵艦が現れた。近づいてきたので、すぐにライトを照らし、一斉に砲撃した。敵艦はすぐに沈没した。)

敵が撃ち返す間もないほどの短時間で圧勝したことがわかる。中国語訳は単なるあらすじになっている。そして、原作では、スパイの男は死ぬ一歩手前であるが、死んではない。しかし、中国語訳では撲殺されてしまっている。やはり unnecessary 改訳に思える。

次に、Ned が男の言葉遣いからフランス人だと見抜く場面を挙げる。

“ You make one vaar grand meestake, ” was the reply, which thrilled the young fisherman with a sudden sense of danger not personal to himself, but of wider, vaster scope. For Ned Springett had once been engaged in the egg trade to Fécamp, and he knew very well that “ grand meestake ” was no Dutchman's broken English. His mind reverted to the wreck of the brig the wreck that a little ordinary seamanship would have prevented. Could it be something more than an accident which had stranded this smatterer of French-English on our shores on a day when they were threatened by the French fleet? (75頁)

(「あなたはとても巨大な間違いをしています。」それが男の答えだったが、この言葉に若い漁師は突然の危機を感じ、ぞっとした 自分ではなく、より広く大きな範囲の危機にである。Ned は以前 Fécamp への卵の貿易に従事し

たことがあり、「grand meestake」がオランダなまりの英語ではないことをよく知っていた。彼の考えは帆船の座礁へと戻った 普段通りに操船していれば防げたあの座礁へと。皆がフランス艦隊に脅かされている日に、我が国の海岸へこのフランス風英語を話す船乗りもどきを上陸させたのは、事故以上の何かがあるのではなかろうか？)

創人曰：“誤矣。吾胡能歩。”尼得聞言甚駭。其駭也。非爲一身。爲國憂也。蓋聞創人操荷蘭語。於音吐之間。似非荷蘭之士著。因思海上舟來。似有意觸此礁石。然其人殆敵軍之間諜耶。(3頁下)

(ケガをした男は「誤解です。私がどうして歩けましょうか。」尼得はその言葉を聞き、大変驚いた。その驚きは、個人ではなく、国を心配する気持ちからだった。ケガをした男はオランダ語を使っていたが、その発音は生粋のオランダ人のものとは思えなかった。舟がやって来て、まるで故意に座礁したようだ、ならばこの男は敵軍のスパイに違いないと(尼得は)考えた。)

男の言葉遣いから、オランダ風英語ではなく、フランス風英語だと見破る所は、探偵小説でも使えそうな話である。しかし、この面白さをそのまま翻訳するのは不可能である。中国語訳のように、発音に置き換えるのもいい方法であろう。

2 - 補 4

《紅篋記》とは別に発表されていた3篇の中国語訳を見てきた。タイトルについては、“探海燈”(海を照らすサーチライト)、“煤礦罷工”(炭鉱ストライキ)と2篇が原題の一部を使用しているが、“林肯救國”(林肯が国を救う)は原題とは無関係で、内容を踏まえたものになっている。

「上」で言及した6篇と併せて、中国語訳発表順に並べると以下ようになる。

- | | | | |
|---|---------|----------|---------------------|
| 1 | 林肯救國 | 【原著者名無】 | 《小説月報》7-3,1916.3.25 |
| 2 | 少尉夏雷尺石忒 | 英國希登希路原著 | 《小説月報》7-4,1916.4.25 |
| 3 | 無綫電報 | 英國希登希路原著 | 《小説月報》7-5,1916.5.25 |
| 4 | 法國魚雷艇受擒 | 【原著者名無】 | 《小説月報》7-6,1916.6.25 |
| 5 | 馬格梯氣球 | 【原著者名無】 | 《小説月報》7-7,1916.7.25 |
| 6 | 三十九號魚雷艇 | 【原著者名無】 | 《小説月報》7-8,1916.8.25 |

- | | | |
|--------|---------|-----------------------|
| 7 挖地道 | 【原著者名無】 | 《小説月報》7-9,1916.9.25 |
| 8 煤礦罷工 | 【原著者名無】 | 《小説月報》7-10,1916.10.25 |
| 9 探海燈 | 【原著者名無】 | 《小説月報》8-1,1917.1.25 |

結局、『Seaward for the Foe』所収全10篇のうち、9篇が翻訳されていた。「上」2-7で、「全10篇のうち、6篇しか訳さなかったのは、もちろん《紅篋記》の篇数に合わせたのであろうが、或いは訳して時代遅れを感じて、興味を失ったのかも知れない。」(72頁)と述べた部分は誤りであり、取り消す。

残りの1篇の中国語訳がどこかに発表されていないか気になる所であるが、まだ見出せていない。

3

《紅篋記》6篇について、副題を発表順に掲げる。

- 1 英國下哀底美敦書於法國 《小説月報》7-4,1916.4.25
- 2 俄國駐土公使繙譯官 《小説月報》7-5,1916.5.25
- 3 俄皇后結婚時賚送之禮物 《小説月報》7-6,1916.6.25
- 4 失去之條約 《小説月報》7-7,1916.7.25
- 5 教皇宮内密室 《小説月報》7-8,1916.8.25
- 6 伊魯馬女優 《小説月報》7-9,1916.9.25

原作は、Headon Hill 『Seaward for the Foe』(Ward,Lock and co.,limited 1903年)の後半に収められる『Perils of the Red Box』6篇である。

3 - 1 <英國下哀底美敦書於法國>

原作は、『Perils of the Red Box』「Peril The Ultimatum to France」である。あらすじを紹介する。

Tel-el-Kebir での Arabi との戦いで負傷し、軍に戻れず帰国した私(Melgund)は、会う人ごとに自らの悲運を嘆いていた。そこに、学校の先輩で、外務大臣の息子の Poindexter から外務省での「Queen's Messenger」の職を紹介される。彼は私の学生時代の要領のよさを覚えており、それを見込んで、父に紹介していた。ただ、彼

が聞いていた噂から、女性関係に注意するようにも言われた。

外務省に行き、大臣の部屋に入る時、著名な投資家 Schwartzroder 男爵とすれ違う。その後、大臣からフランスへの最後通告をパリのイギリス大使館まで届けるよう命じられる。その際、これが公になると、金融市場が大幅に下落するので、Schwartzroder らが私のパリ行を妨害するかも知れないと注意される。

自宅へ戻り、夜9時に出発することにし、一旦夕食に出かけた。その間に外務省の制服を着た使いが大臣の手紙を届けた。内容は、文書配達のついでに、大臣の姪で、Willesden 伯爵夫人の娘、Alicia Davenant を連れてパリまで行くよう依頼するものだった。その依頼の真偽を確かめようと電話をかけるが、大臣も秘書も不在だった。夫人達に面識は無く、文書の入った赤い箱を持ち、真偽不明なまま駅へ赴いた。

到着後、すぐに Willesden 夫人に声をかけられ、Alicia を預けられる。列車へは Schwartzroder も乗り込んでいた。車中で Alicia から赤い箱について話しかけられ、彼女に渡して見せるが、彼女は箱が鎖で私の腰とつながれており、それをはずせないのを知ると、失望し顔色が変わったようだった。

その後、フランスに着き、乗車の際、Schwartzroder とその連れの男と相席になりかけるが、彼女が強く拒否したので、Schwartzroder 側があきらめる。これで彼女への疑いが無くなり、我々2人は打ち解けた恋人同士のようになる。

早朝、パリに到着、馬車で大使館へ向かう途中、彼女を目的の家まで送り届けることになった。その家まで行くと、門番がおらず、彼女を手伝って荷物を玄関の中まで運んだ。ドアの内側には銃を持った男達が待ち構え、私は捕らわれの身となる。1人は Schwartzroder の連れで、赤い箱を失ったことにするか、午後に金融市場が閉じるまでここにいるかを私に迫った。Schwartzroder らはヨーロッパの主要都市には二度と住めなくなるだろうと私は言い返した。男は、それならば計画を少し改める、Schwartzroder に相談するが、悲しい結末になるかも知れぬと言い、私を密室に閉じ込めた。少し時間が経ち、不安に満ちて震えている彼女がやって来る。彼女は、連中は私を殺そうとしていると言い、警察沙汰にしないなら私を逃がすと言う。私はしないと約束し、この件の経緯を聞き、最後になぜ自分を逃がそうと危険を冒すのか尋ねた。彼女は、とても素敵に愛を語ってくれたから傷つけるには忍びないと答えた。私は部屋を出、赤い箱をしっかりと持って屋敷を脱出し、大使館へ行った。その途中、注意された女性関係でつまずいたが、結局は救われたし、要領

のよさ以上にいい方法があるものだと考えた。

最後通告は時間通りに届けられ、フランスは譲歩することになった。金融市場の下落により、Schwartzroder は大損し、私を大変恨むことになった。

気さくで、本能に忠実な主人公のおかげで、文書配達という地味そうな仕事がスリリングな物語になっている。

中国語訳について述べる。他にも訳されていた場合の参考にできると思うので、主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Melgund	密路干德
Poindexter	波因特司忒
Alicia	亞利西亞
Schwartzroder	掃諸路德

タイトルについて、「Ultimatum」を“哀底美敦書”と音訳している。「上」2-5でも述べた(69頁)が、そこでは“哀的美敦書”としていた。また、この本文中では“最後之書”とも訳している(4頁下)。やはり訳語は統一した方がいいと思う。

内容については、後半に省略が多い。加筆や改訳も少し見られる。

冒頭に主人公 Melgund について、なぜ Queen's Messenger になったかの説明があるが、中国語訳は加筆して史実を説明している。その部分の原作と中国語訳を挙げる。

When Arabi's gunners loosed off that nine-pound shell from the right flanking battery at Tel-el-Kebir they spoiled a good soldier. At least so Sir Evelyn Wood was kind enough to hint, as the dust of the explosion cleared and left me a bleeding heap at his feet, with scarce strength to splutter the order that I had brought to him from Wolseley.

“Melgund will fight no more, and he was a proper fighting man,” was the lullaby to the tune of which I swooned while they packed me into the ambulance.(199頁)

(Tel-el-Kebir で Arabi 側の砲手が9ポンド砲を右側面を守る砲台から発射した時、すばらしい兵士が1人ダメになった。とにかく Evelyn Wood はそう言おうとしていた、Wolseley の所から持参した命令書を吹き飛ばすほどではなかったが、爆発のほこりが消え、彼の足元で私が血まみれの塊のようにになっている時だった。

「Melgund はもう戦えまい、立派な戦士だった」というのが、私が野戦病院へと運ばれる途中に気を失いながら聞いた子守歌だった。)

一千八百八十二年。哀埃有兵官。叛英而獨立。其人爲革黨魁率。名亞拉比。於九月十三號。英兵戰於泰里提鉢間。獲亞拉比。流之希蘭島。方其戰時。亞拉比軍出一巨礮。死英軍中一精良之牙將。及礮煙過處。英軍中大將伊威林固德呼曰：“密路干德。不能戰矣。”蓋受彈之人。即密路干德也。本以馬賈大將烏律司類之號令。及中彈而仆。幾不能口述其號令。周身是血。臥於沙場中。而伊威林固德歎息之言。密路干德一一聞之。顧乃不能答。遂載密路干德於創人車上。赴行軍醫院。(1頁上-下)

(1882年、哀埃の士官がイギリスに反抗し独立した。彼は革命党の首魁で、亞拉比と言った。9月13日にイギリスは泰里提鉢で戦い、亞拉比を捕らえ、希蘭島へ流刑にした。その戦闘時、亞拉比軍は大砲を撃ち、イギリス軍精鋭の勇將を死なせかけた。砲弾の煙が消えた時、イギリス軍の大將、伊威林固德は「密路干德はもう戦えまい」と言った。砲弾にやられたのは、密路干德だった。彼は馬に乗り、大將、烏律司類の命令を届けようとし、砲弾に当たって倒れたのだった。命令をほとんど伝えられず、体中血まみれで、砂漠に倒れていた。伊威林固德のため息まじりの言葉を、密路干德はすべて聞いていたが、答えることはできなかった。密路干德はけが人を運ぶ車に載せられ、軍の病院へ運ばれた。)

この戦闘は、イギリスから見て、エジプトの Arabi Pasha が起こした反乱で、最終的にはイギリスが鎮圧し、Arabi Pasha はセイロン島へ流されたのである。原作は何も説明しないが、1903年の刊行時もイギリス人にとっては容易に思い出せる出来事だったのであろう。当事者ではない中国の読者のために、中国語訳の加筆説明は自然なことだと思う。

改訳(或は誤訳)を一例挙げておく。最後の場面である。

Not only had I given “ Lady Alicia ” my promise, but it would have been a little awkward to have had to explain how nearly, and by what method, the Red Box had been imperilled.(229頁)

(「Lady Alicia」との約束を守った上で、赤い箱がどうして、そしてどんな方法で危険な目に遭ったのかを説明しなくてはならないのは少し難しいことであった。)

余已允此女。不告之官中。亦不以紅篋之事告人也。(10頁)

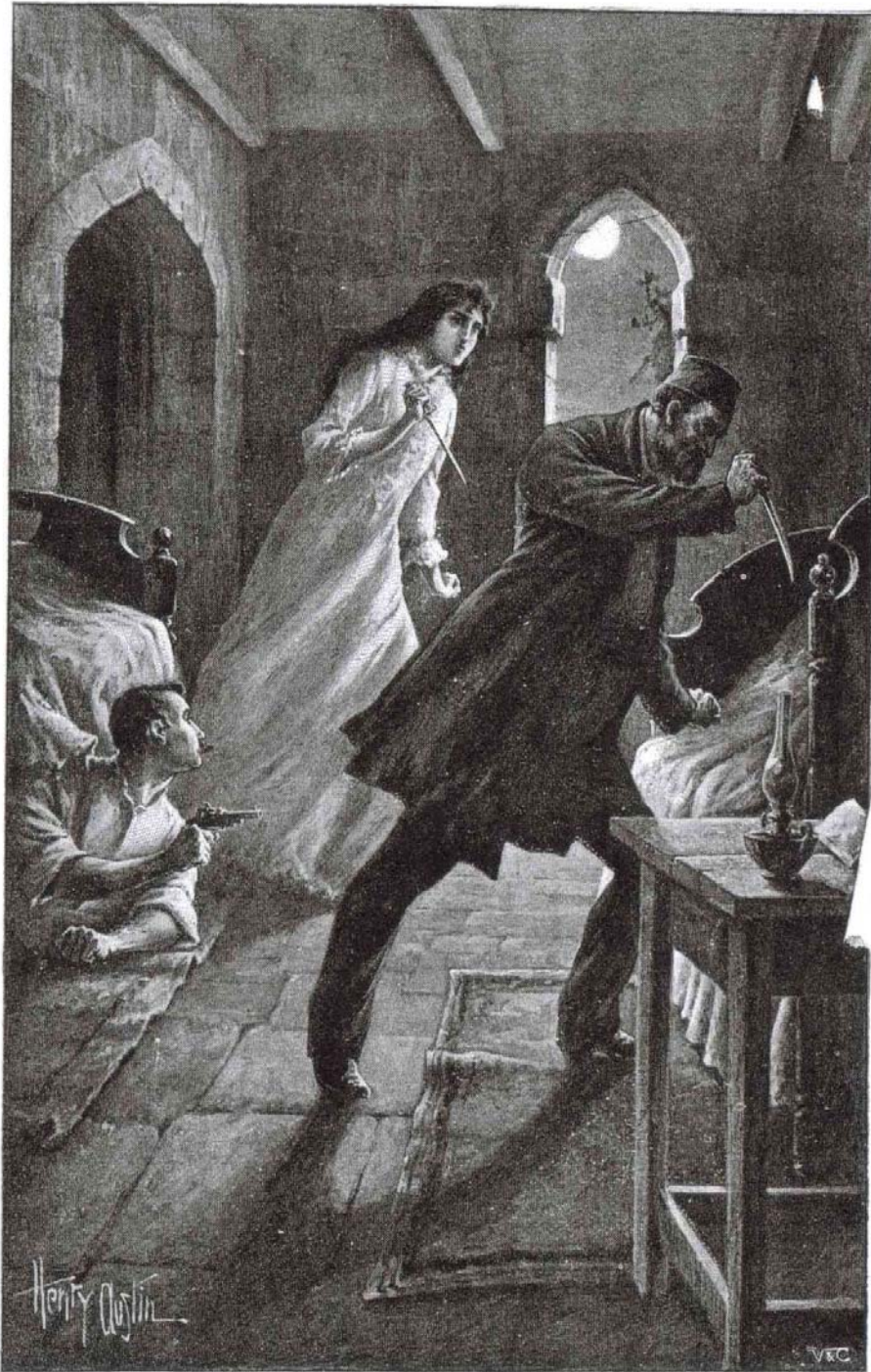
(私はすでにこの女性を許し、警察には言わず、また赤い箱のことも誰にも言わなかった。)

原作では、任務終了後に何らかの報告をしたように見える。しかし、中国語訳では、大使館に文書を届ける前にパリで起こったことは一切隠し通してきたようである。

他に、原作では「Lady Alicia」のことを、会った時には「a very pretty one」(とてもかわいい人)だの「this comely maiden」(この美しい乙女)などと述べている(213頁)。また、道中では「my fair vis-à-vis」(私の魅力的な向かいの人)だの「this dainty butterfly」(この上品な蝶)などと述べ(216頁)、罨にはまった後には「the pretty little decoy」(かわいい小さな罨,222頁)、「the impudent hussy」(恥知らずのお転婆,227頁)などと述べている。一方、中国語訳は、“玉人”(宝石のように美しい人,7頁上)が1か所見えるだけで、他は単純に“女”や“女郎”になっている。原作の女性への細かな形容は、主人公の性格と彼女に対する気持ちの変化を表しており、物語を楽しむための面白いポイントだと思うのだが、翻訳はそこまで手が回らなかったのであろう。

3 - 2 < 俄國駐土公使繙譯官 >

原作は、『Perils of the Red Box』 「Peril The Dragoman of the Russian Embassy」である。あらすじを紹介する。



"A white-swathed form glided behind him." (Page 257.)

Seaward for the Foe

[Frontispiece

私(Melgund)は Constantinople で本国への文書配達を待っていた。ホテルのホールで随行員の Peters とくつろいでいると、1人の男が入ってきた。Peters はその男が Zgoureff というロシア大使館の通訳の1人であると教えてくれた。そこに、大使館の使いが現れ、大使に会って文書を受け取りオリエント急行で本国に帰るよとの伝言を伝えた。その後、Peters は私に Zgoureff には注意するよと忠告してくれた。

大使に会い、文書を受け取った。その時、大使から、この文書の中身をロシアかドイツかが知れば、暴力的に問題を解決しようとし、Tsar か Kaiser かがヨーロッパの支配者になるだろうと言われる。更に、文書は特別な暗号で書かれていると言われ、解読表を渡される。私は文書を赤い箱に、解読表を手帳に収め、出発した。

Zgoureff のことが気掛かりで、列車に乗ってくるかどうかしっかりと見張った。彼は乗らなかったが、ドイツ大使館の通訳、Demetrios が隣の車両に乗り込んできた。

深夜、Adrianople に停車した時、私は食事をしに下りた。コンパートメントに戻り、扉を閉め、赤い箱を置こうとした時、端に Demetrios がいた。自分は商人だと言う彼に銃を向け、彼の正体を知っていることを告げ、おとなしくさせた。私が Zgoureff の名を出した時、Zgoureff が狙っているならば、箱だけでなく、その持ち主の命も手にするだろうと言われる。Demetrios は別の車両に移った。

列車が山間のカーブを走っていた時、衝撃と共に脱線・転覆した。私は頭に傷を負い、気絶したが、その前に、レールの上に材木が積まれていたのを見、事故ではなかったことを知る。

意識を回復した時、ベッドに横たわっており、そばには美しい女性、Daphne がいた。私はギリシア語で話しかけ、赤い箱のことを尋ね、枕の下にあったそれを調べるが、肝心の暗号文書だけが失われていた。ただ、手帳の解読表や携帯していた銃は無事だった。私は甘言で Daphne に話しかけ、彼女を味方にする。同じ部屋には、Demetrios も傷ついて横になっていた。また、姿勢を変えた瞬間に Zgoureff の顔も見えた。Demetrios との会話から、彼が以前から Daphne に好意を持っていること、Zgoureff は Daphne の兄だということ等を知る。その後、私は外に出て周囲を見て回り、途中で Daphne に会い、そのまま家に帰り、彼女の母と3人で食事をした。Demetrios を見舞いに部屋に行くと、彼から、私が外出した後、Zgoureff がやって来て、イギリス大使館の使いを買収して解読表を入手するため、

Constantinople へ戻ると言っていたと聞かされる。私は騙されたふりをして、解説表を携帯していることを Demetrios に話し、それから Daphne と散歩に出かけた。Daphne は誰かと口論していたようで、顔を紅潮させ怒っているようだった。しばらく2人で過ごした後、夕食を彼女の母と3人で食べ、Demetrios のいる部屋に戻った。

明かりを消し、外套や赤い箱を寝具で覆い、ベッドに寝ている風を装い、銃を持って、Demetrios のベッドの下に潜り込んだ。しばらくすると、短剣を持った Zgoureff が現れ、私のベッドへと向かった。私が飛び出そうとした時、突然、もう1本の短剣が月光に光り、Zgoureff は倒れた。その持ち主は Daphne だった。

私は翌朝、取り戻した文書を持って、線路の方へ下りていった。その後、Demetrios の求愛の話は聞かなかったが、Pera で彼を見かけた時は浮かない顔をしていた。

わずか半日で、初めて会った異国の女性をここまで夢中にさせるとは、よっぽどの軟派者なのだと思ってしまう。列車の脱線という大事故にもかかわらず、負傷したのが偶然にも私と Demetrios の2人だけだったり、Zgoureff が気絶していた私から銃を奪わなかったなどと、都合の良い物語展開も見られる。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Peters	匪忒司
Zgoureff	高雷甫
Daphne	達敷妮
Demetrios	知美崔阿司
Constantinople	君士坦丁

内容については省略が少し多い。文書を預かった後、Zgoureff の行動を思い出す場面、列車内の細かな様子や車外の風景の叙述、奪われた文書を取り戻すために考えをめぐらす場面、にまとまった省略が見られる。また、地の文を台詞に改めているのが数か所ある。そして、仕方のない所ではあるが、Demetrios の話す拙い英語(動詞はほとんどが現在形のまま、much mooch や sir sare と発音する等)がすべて普通

に訳されている。

最後の室内での場面を挙げておく。

The room had been in inky darkness when I extinguished the lamp, but the moon had risen since and the objects in the room were faintly discernible. The four coughs of the worthy Demetrios brought a new object into vision the fezzed and rather portly figure of Zgoureff, tip-toeing from the doorway towards my bed. His hand clutched a dagger, as I had known it would after that confidence to Demetrios, and I rolled gently on to my side, covering him with my pistol. I was not going to shoot him, unless he asked for it by showing fight, but I meant having the despatch.

And then, suddenly, just as I was about to call to him and “ bail him up ” while he poised his knife for the stroke so suddenly that I could not interfere a white-swathed form glided behind him. Another knife gleamed in the moonlight, and my would-be murderer fell dead on the dummy heap that represented his intended victim.

That passionate, half-bred girl, knowing her brother, had been watchful, and had acted according to her impulses. But as I went down the gorge in the morning to the railway, with the missing despatch, recovered from Zgoureff's breast-pocket, restored to the red box, I thanked my stars that she had repelled me from the first.(257-258頁)

(私がランプを消した時、部屋は真っ暗闇だった。しかし、その後、月が上り、室内の物はぼんやりとわかるようになった。尊敬すべき Demetrios が咳を4回した時、新たな物が視界に現れた トルコ帽をかぶった、かなり恰幅のよい Zgoureff の姿で、ドアの所から私のベッドへとつま先立ちで歩いてきた。手には短剣を握りしめていた、(Zgoureff は) Demetrios を確認してから行動するだろうと気付いていたので、彼に銃を向けつつ、私は静かに私のベッドの方へ這い出た。彼が抵抗して自ら災いを招かない限り、彼を撃つ気は無く、ただ文書を手に入れるつもりだった。

そして、突然、ちょうど彼に「手を挙げる」と呼びかけようとした時、彼は突き刺そうとナイフを構えていた 突然すぎて、防ぐことができなかった

白衣に包まれた姿が彼の背後に滑るように進んできた。もう1本のナイフが月光の中、きらりと光り、私を殺そうとしていた男が、私に見せかけた替え玉のかたまりの上で息絶えた。

この情熱的な混血の少女は、兄のことを知っており、用心深く、自らの衝動に従って行動したのだった。ただ、朝、Zgoureff の胸ポケットから取り戻し、赤い箱に元通り収めた紛失文書を持って、線路に向かい小さな峡谷を下りていきながら、私は彼女がまず最初に私を追い払ってくれたことの幸運に感謝した。))

時屋中洞黒。然殘月已上。映入窗中。微微見影。見知美崔阿司咳止。門外忽入一人。冠紅帽。則高雷甫也。直撲余之牀榻。手短劍一。余已自端其鎗。初無殺人之意。但得余之公文足矣。

見高雷甫舉刀。方欲力刺吾衣。立見高雷甫背後。有人疾下其刃。而高雷甫立仆。視之。即其妹達敷妮。以彼將加害余身。故救予而殺彼。明日檢其尸。得公文。予遂攜之以行。(18頁)

(その時、室内は真っ暗だったが、月が上り、窓に映り、ぼんやりと影が見えた。知美崔阿司の咳が止んだ時、ドアの外から突然人が入ってきた。頭には赤い帽子をかぶり、それは高雷甫だった。私のベッドへまっすぐに向かい、短剣を手にしていて。私は銃を構えていたが、殺す気は全く無く、ただ文書を手に入れれば十分だった。

高雷甫が短剣を振り上げ、正に私の服を刺そうとした時、突然、高雷甫の背後に人が現れ、すばやくナイフを振り下ろすのが見えた。高雷甫はすぐに倒れた。

見ると、妹の達敷妮だった。高雷甫が私に危害を加えようとしているので、私を助けて高雷甫を殺したのだった。翌日、遺体を調べ、文書を手に入れると、私はそれを持って出発した。))

3 - 3 < 俄皇后結婚時賚送之禮物 >

原作は、『Perils of the Red Box』 「Peril The Tsarina's Wedding-Present」である。あらすじを紹介する。

私(Melgund)は Fraulein Netta von Friednau と楽しんでしたが、2か月休みがあり、一旦彼女と分かれた。彼女は、Silesia の某大公妃の侍女で、妃に従ってイギリスに来ていた。11月初めロンドンに戻り、Selhurst 公爵の夕食会に出た時、妃と彼女も出席しており、再会を喜んだ。彼女の話では、ロシア皇帝の結婚式で、贈り物に特注のティアラを作っており、完成次第、それを持ってロシアに出発するとのことであった。その後、公爵(外務大臣で、私の上司である)に帰宅の挨拶をしようとした所、そのまま書斎に招かれ、明後日に外交文書をロシアまで届けるよう言われる。更に、特注ティアラも一緒に運ぶよう頼まれる。大臣によると、強盗が企てられているとの匿名の手紙がティアラを作っている宝石店に届き、それを恐れた大公妃から有力者の口添えと共に要請があったということだった。当然断れず、2日後、私は宝石店でティアラを受け取り、赤い箱にしまい込み、併せて立派な便箋に書かれたその手紙も見せてもらった。

後、汽車で Queenborough へ行き、船に乗り換える。なんと船には大公妃一行も乗っていた。偶然かとも思ったが、妃の従者、Baumann に監視されているようで気分を害していた所、そこで再会した Netta の話では、大公妃の命令で、私が特注ティアラを持ち逃げしないよう彼女自身と共に見張っているとのことであった。私はかなり憤慨したが、Netta の魅力に負けて、口を閉じていた。

その後、私は列車に乗り、大公妃一行には特別車両が用意されていた。途中、Netta と話す機会は無かった。ロシア国境の駅で、荷物検査が進められている時、私は貨物室へ行き、妃の代わりにロシアの係官を見張っていた Netta に声をかけた。彼女は、大公妃の私に対する疑いはすっかり晴れたと言い、私も、ロシアに入ればイギリスの強盗団も手を出せないだろうなどと話した。大公妃一行は誰もロシア語ができないようだったので、私はロシア語で妃の荷物検査が早く済むように促した。その時、威厳のある男性の声が「Fraulein von Friednau！」と彼女を呼んだ。私は声の主を捜したが、大公妃のお付きと言え、外套を運んでいた背の高い従者だけだった。その声とその声に対する Netta のすばやい反応から、何らかの政治的理由で、大公自身が身分を隠すために従者に扮装しているのではないかなどと考え、そこを去る折、その従者を見ると、写真で見た大公とよく似ており、ますますその考えを強くした。そのことを Netta に確認する機会は無かった。従者に黒いコートの男が加わり、列車は Petersburg に向けて出発した。

途中の駅で Netta が現れ、大公妃が病気になり、侍医から進むのを止められたと

言われ、旅を中断することを車掌らに伝えるよう頼まれた。私は快諾し、それを伝え(この時、黒いコートの男は侍医だとわかった)、大公妃を抱えて列車を下り、一行の特別車両は切り離された。更に、彼女から、遠回しに通訳として一緒に残ってくれるよう頼まれる。公務を優先させようとしたが、結局、残ることにした。駅の隣のホテルに着くと、フランス人の経営で、私の役目は無かった。Netta は大公妃につきっきりで、私は公務に背いたことや Netta に会えないことで、ちょっといらいらしながら、朝一番の列車で出発するという伝言を送った。

翌朝、朝食をとろうとした所、Netta が飛んで来て、大公妃がとても感謝しており、私の出発前に自らお礼が言いたいと言っていることや、侍医が式への出席を許さないで帰ることになったことを話した。すぐに彼女と一緒に妃の部屋に行った。部屋に入ると、妃は起き上がり、感謝の言葉と共に私に「the Knighthood of the Golden Sword」を授けようとした。その儀式の際、私はじゃまになった赤い箱を Baumann に手渡した。ソファの端の方で何かが少し動いたので、その方向を見ると、なんと赤い箱が2つ見え、本物と偽物を取り換える所だった。私はすぐに本物の箱を持った、背の高い従者を取り押さえ、妃の前に突き出し、警察を呼ぶと話した。周りにいた Netta は怒りの形相で、彼女がこの企みの主犯の1人なのは明らかだった。すると、大公妃は「私が泥棒です」と重々しく告白し、私が取り押さえた男は実は大公であると話した。妃は更に、皇帝の結婚式へのプレゼントを負担する経済力が無く、特注ティアラに保険をかけ、途中で盗まれたことにし、保険金を手に入れ、ティアラもばらして売ってしまい、そうすればまた別のプレゼントが買え、しかもお金も手に入ると考えたこと；宝石店への手紙は Netta に書かせたこと；船上で私を疑っていると言うことで、私が大公妃を疑わなくなると考えたこと；大公は自分の指示通りに動いただけだということ等を話した。結局、私は不問に付し、赤い箱をロシアのイギリス大使館に届けると言い残して去った。

結婚式での大公妃のすばらしいプレゼントはロシアの人々の話題になり、また、大公が自分の領地をベルリンの銀行家に売ったという発表が新聞に載った。

大公夫妻による保険金詐欺未遂事件の顛末である。担保が無くても、権威により、しかも外国で、高価な装飾品を作らせたり、恐らくは王族の親類という関係により、他国の外務省を動かしたり等々、作り話ではあるが、二十世紀初頭の欧州ではこのような話がまだ自然に語られるほど、血統の価値が重視されていたことがわかる。

ちなみに、Silesia(シレジア)は現在のポーランド南西部及びチェコ北部の地域であり、ドイツ語表記の Schlesien(シュレジエン)の方が日本では通りがいいかも知れない。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Netta	耐他
Silesia	斐里西亞(24頁上),西里西亞(27頁上)* ¹

内容については、省略が散見される。誤りと思われる個所を挙げておく。大陸に向かう船に乗り、同じ船に大公妃一行が乗っているのを見かけた際の主人公の感想である。

A moment's reflection showed me that there was no real reason for astonishment. I knew that the Grand Duchess was due at Petersburg for the wedding in the course of a few days, quite irrespective of the costly present she was giving. Her travelling in the same boat with the tiara which she had been afraid to convey herself was therefore a quite intelligible coincidence a coincidence which was altogether delightful as suggesting my obvious duty in demanding explanations from Netta von Friednau.(267-268頁)

(少し考えると、驚く理由が無いことに気付いた。大公妃は2~3日以内に結婚式のため Petersburg に着いているはずで、それは贈ろうとしている高価なプレゼントとは全く関係ないのである。したがって、妃が、自身で運ぶのを恐れたティアラと同じ船に乗り込んでいるのは、非常にわかりやすい偶然の一致なのであった この偶然の一致は、Netta von Friednau に説明を求めるといふ、私の義務につながるので、本当に愉快的なことであった。)

余思夫人本赴俄京。故與余同舟而行。既已同舟而行。何必以此冕屬予。令予引重而致遠。又何謂耶。(21頁下)

(私は考えた、大公妃はそもそもロシアの首都に行くことになっており、私と同じ船で向かっている。同じ船で向かうならば、どうしてこの高価なプレゼン

トを私に託す必要があったのだろうか。私に重責を引き受けさせ、遠くまで行かせようというのは、何を考えているのだろうか。)

原作は、Netta と話す機会が早くもやって来て、うれしがっている主人公なのだが、中国語訳は、大公妃への不満になっている。

最後に、大公妃一行が主人公に盗みを仕掛ける場면을挙げる。

The secretary was offering me a book, but for the moment my hold on the red box prevented prompt obedience to the command. Baumann, as though divining my difficulty, held out his hand; and, perceiving no danger to my precious charge in the presence of the august owner of most of its contents, I allowed him to relieve me of it.

And then, suddenly, while I was mumbling certain out-of-date vows after the Grand Duchess, a slight movement at the head of the couch caused me to raise my eyes. Two exactly similar red boxes met my astonished gaze, one being passed by an unseen person in the inner room to Baumann, who was exchanging for it the genuine article which I had just surrendered to his keeping. Even as I looked the exchange was effected, but I was on my feet in an instant, and rushing into the inner room pinned the tall footman to the wall. He held the red box my red box in his trembling hand.

“Come in here, you rascal!” I cried, dragging him into the outer room, and taking the box from him. “Your Serene Highness,” I continued to the Grand Duchess, who had risen pale and agitated from the couch, “this fellow and your secretary have conspired to rob me to rob you, in fact by substituting a dummy box for the real one. See! Baumann still holds the counterfeit. I shall at once summon the police and give them into custody. In Russia they will meet with quick justice.” (286-287頁)

(秘書が私に聖書を差し出した、しかし、その時、私は赤い箱をかかえていたので、すぐに(大公妃の言いつけに)従うことができなかった。Baumann は、まるで私の困惑を予知していたかのように手を伸ばした。私は、箱の大事な中身の、威厳ある所有者の面前で、貴重な預かり物が危険にさらされるとは思わず、

秘書の手に箱を委ねた。

そして、大公妃について昔風の誓約をもぐもぐ言っている間、突然、寝椅子の頭側が軽く動いたので、私は目を上げた。2つの全く同じような赤い箱があり、大変驚いた、1つは奥の部屋にいる誰かから Baumann に手渡されており、その人が、Baumann に預けた本物の箱をその1つとすり替えていた。私が見ていたちょうどその時、すり替えが行なわれた、私はすぐに立ち上がり、奥の部屋へ駆け込み、背の高い従者を壁に押さえつけた。男は赤い箱 私の赤い箱を震える手で持っていた。

「こっちへ来い、この野郎！」私は男を外へ引っ張り出し、男から箱を取り戻しながら叫んだ。「大公妃様」私は大公妃に向かって続けた、妃は青くなって立ち上がり、寝椅子を激しく揺り動かしていた、「この男と秘書が共謀して私に盗みを働きました すなわち、あなた様に対しても盗みを働いたのです、偽の箱を本物と取り換えていました。御覧下さい。Baumann はまだ偽物を持っています。すぐに警察を呼んでこいつらを拘束します。こいつらはロシアで即決の裁判を受けるでしょう。」)

余遂受包滿之書。包滿即引手代余挾紅篋。余以爲包滿夫人之近習。必無異心。即授之以篋。

余捧卷。而夫人誦經。忽見夫人所倚之榻微動。余即引首而觀。隱隱見幃中一侍者。別攜一紅篋授包滿。包滿即以予之紅篋。授幃中人。然已交換。余力追入內。奪取其篋。即碩大之侍者也。

斥曰：“汝可出面夫人。”即收歸原篋面夫人。而夫人顔色頓變。余曰：“夫人之侍者及秘書。以僞篋易吾眞篋。試觀包滿手中。尚持僞篋。”我當力呼巡警。囚此二人。(26頁下)

(私は包滿から聖書を受け取った。包滿はすぐに手を引き、私の代わりに赤い箱を抱え持とうとした。包滿は妃のお付きで、おかしい気は絶対に起こさないと考えたので、私は彼に箱を預けた。

私は聖書を捧げ持ち、大公妃は文句を読んだ。ふと大公妃が使っていた寝椅子が微かに動くのが見えたので、私はすぐに首を引いて見た。カーテンの向こうに従者が一人いるのがほんの少し見え、もう1つ赤い箱を持ち、包滿に渡していた。包滿は私の箱をその従者に渡していた。すでに取り換えていたが、私

は猛然と中まで追いかけて、箱を取り返した。それは背の高い従者だった。

従者をなじって「お前、大公妃様の前に出てこい。」箱を取り返し、大公妃の前に戻った。妃の顔色はさっと変わった。私は「あなた様の従者と秘書が、偽の箱を本物と取り換えていました。御覧下さい、包満の手にはまだ偽物があります。」私はその場で警察を呼び、この2人を捕らえてもらおうとした。）

3 - 4 < 失却之條約 >

原作は、『Perils of the Red Box』 「Peril The Lost Treaty」である。あらすじを紹介する。

私(Melgund)は、漁業権に関する条約文書を携えて、アメリカに行くことになった。上司の話では、大統領選挙が2週間後に迫っており、アメリカ大使は条約を通すことで自分の党が信頼を得るのを切望しているとのことであった。

2日後、高速船に乗り出発した。船は帰国するアメリカ人旅行者でいっぱい、彼らが選挙について話すのに飽き飽きしていた。退屈を紛らすため、船内をうろついていた所、1人の女性を見かけた。彼女に声をかけるが、相手にされなかった。更に、彼女が男性と挨拶を交わすのを見かけた。客室係によると、女性はシカゴの Miss Cordelia K.Lafflin で、男性は住所不定の William R.Dobson とのことであった。翌日、Dobson に声をかけられた。彼は『New York Tribune』の特派員で、私には思い出せなかったが、私の軍隊時代の活躍を見ていたと言い、その述べる所は正確であった。Dobson と親しくなったので、私は Lafflin に紹介してくれるよう頼んだ。Dobson に彼女が上院議員の娘であることなどを教えてもらい、Dobson の仲介もあって、たちまち彼女と親しくなった。初対面時の私の現在の仕事に関する質問には慎重に答えたが、その後は、私がそんなに女性になれなれしい男だと知らなかったし、彼女を紹介するのを再考すべきだったと Dobson に言われるほど、親しくなった。

アメリカに到着し、Dobson からニューヨークのホテルを紹介してもらった。下船時、Lafflin から彼女の父との夕食に Dobson と共に招待される。後、私はホテルに行き、Dobson の忠告に従い、赤い箱を金庫に預けた。

8時に招待されたホテルに着き、Dobson と共に特別室へ向かう。途中、Dobson に向かって「上院議員！」と呼びかける人がいたが、Dobson は人違いだと言う。

部屋には Lafflin だけがいて、彼女の父は遅れてやってくるとのことであった。船上で知り合っただけにしては豪華すぎる食事なので、Lafflin に父に会ったのかと尋ねると、彼女は狼狽して電話で話をしたと答えながら、すがるような目で Dobson の方を見たようだった。食後、Dobson が急に親しげに私に話しかけ、Lafflin を退室させた。Dobson は、自分が Lafflin 上院議員だと名乗り、私に近づき赤い箱を奪取するため、同じ船を予約し、私の軍歴について下調べをしていたと話した。更に、赤い箱に入っている条約文書を紛失するか、翌週の大統領選挙が終わるまでとっておけば、私は Cordy(= Cordelia)と100万ドルをもらえるなどと持ちかけた。私はきっぱりと断り、ホテルを後にした。帰り道、cab から下りてきた数人の男に薬を嗅がされ、気を失った。

気がつくやうに、場末の酒場の中で横たわっていた。店主にここの場所や連れて来られたいきさつを聞かすが、誰が連れて来たのかについては全く知らないと言われた。自分の持ち物を見ると、時計やお金は無事だったが、ホテルの金庫に預けた赤い箱の引換証だけがなくなっていた。店のバーテンダーの1人に見覚えがあったが、誰かはわからなかった。

2時にホテルに戻ったが、赤い箱は2時間前に引き取られていた。次に、昨晚招待されたホテルに行ったが、2人とも深夜にチェックアウトしており、行き先もわからないとのことであった。私は警察署に行き、これまでの経緯を話した。警察官は、Lafflin という名の上院議員はいないし、Dobson に「上院議員！」と呼びかけたくだりも計画の一部だと言った。ただ、私が放っておかれた場所について、どうして時計やお金は盗まれなかったのだろうとも話した。

すべて外務省に報告すべきかを考えながら警察署を出た時、1人の男がイギリス軍式の敬礼をして立っていた。彼は酒場のバーテンダーで、Jem Spalding といい、軍隊時代の部下で、戦闘時には勇敢な騎兵だった。Spalding は、私を酒場まで運びすべてを仕切っていた男はケンタッキーの Chapman 上院議員だと話し、居所も教えてくれた。私は Spalding と分かれば、署に戻り、赤い箱さえ戻れば公にしないことを条件に、数名の警官と共に Chapman の所に行き、赤い箱を取り戻した。公にならないと知った Chapman は憎まれ口を叩いたが、娘は2階から父に「考え直して、私を連れに来てくれたの？」などと声をかけたので、ホテルで持ちかけられた取引は本気だったのだなと思った。しかし、たとえ彼が五千万長者であっても、破談になったことに後悔していないとも思った。

最後だけ読めば、主人公は金にも色にも惑わされない忠実な配達人にも見える。しかし、そもそも退屈な船内で異性の話し相手を物色していたのは主人公であり、原作発表当時にイギリス - ニューヨーク間が何日間かかったのか不明であるが、職務と考え合わせれば、どうしておとなしく我慢できないのかと思ってしまう。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Lafflin	拉佛鈴
Dobson	多ト森
Chapman	叉波漫
Spalding	司巴丁

内容については、省略が多いことが言える。一例を挙げる。主人公が最初に女性に声をかけ、相手にされなかった直後の場面である。

There was nothing for it but to raise my cap, mutter an apology, and continue my deck-tramping with as much unconcern as was consistent with politeness. A man of the world knows how to carry off these little rebuffs, and I flatter myself that I did not show that I was taken aback not only by her words but by their accent. I had formed the opinion that the girl was English, whereas her speech betrayed her as an American at once.(293-294頁)

(帽子を上げ、小声で謝罪するだけだった。そして、前と同じく上品に、全く何も無かったかのようにデッキの散歩を続けた。世慣れた男はこのようなちょっとした拒絶をどう処理するか知っており、彼女の言葉だけでなく、そのアクセントにも面食らったのを表に出していないと内心思っていた。彼女はイギリス人だと考えていたが、その話し方からすぐにアメリカ人だとわかった。)

余即鞠躬爲禮。自承其過。面無愧色。然細觀其狀。似英國種人。其音則美。其狀則英也。(30頁上)

(私は頭を下げて、自らの非を認めたが、恥ずかしさを顔には出さなかった。

彼女の姿形を観察してイギリス人だと思った。その発音はアメリカ人で、格好はイギリス人だった。)

次に訳しすぎの例を挙げておく。Spalding が主人公に話す場面である。

“ Then listen to me, sir, ” he replied. “ I don't tumble to why you want to know, or what the racket is, but I can put you on to the boss of the blokes that brought you to Gallagher's. Gallagher is a bit of a politician, and the big pots at the game use him sometimes. The chap you're looking for the one who planted you in the saloon, and it was all fixed up beforehand was Senator Chapman of Kentucky. But he's got a house in this city, and if you want him, I expect you'll find him at 64 West Twenty-third Street. ” (319-320頁)

(「上官殿、お聞き下さい」彼は答えた。「私は上官殿が知りたがっている理由も、仕事は何かも知りません、しかし、上官殿を Gallagher の店まで運んできた連中のボスをお知らせすることはできます。Gallagher はちょっとした政治家で、お偉方が時々遊びで奴を利用します。上官殿がお捜しなのは酒場に上官殿を放置し、それもすべて事前に手配されていたことです それは、ケンタッキーの Chapman 上院議員です。彼はこの町に家があり、もし彼をお捜しならば、西23番街の64で見つけられます。」)

司巴丁曰：“公且聽吾言。公爲人所陷。昇入加拉格肆中。肆主亦政黨也。時時助此議員行事。今盜篋之人。名曰又波漫議員。爲肯他克人。彼在紐約。本有居處。欲覓其人。在西二十三道街。屋爲六十四號是矣。”(36頁下)

(司巴丁は「上官殿、お聞き下さい。上官殿は誰かの罠にかかり、加拉格の店に運び込まれました。店主も同じ党で、よく議員を助けて何かやっています。今回、箱を盗んだ者は、又波漫議員で、ケンタッキーの人です。そもそも彼はニューヨークに家があります。彼をお捜しならば、西23番街の64号がその家です。」)

原作で、Gallagher が「politician」と言うのは、文字通りでは無かろう。また「the big pots」も複数であるから、議員とは限らないだろう。更に、主人公が酒場

にいた時点では、赤い箱が引き取られていたことはまだわかっておらず、赤い箱について一言も話していない。故に、中国語訳で“盗篋之人”と言うのは、司巴丁(Spalding)が知りすぎていることになる。

最後に主人公が乗り込んだ時の、Chapmanの台詞を挙げる。

To do the fellow justice he took his defeat well. He looked a little crestfallen at first, but when he found that no official notice was to be taken of his attempt he broke into a hearty laugh.

“What riles me is that, instead of having a good time on the ship electioneering as Senator Chapman, I was advertising you as a little tin hero, captain, in the disguise of a war-correspondent. If I'd only known how things were to pan out, you wouldn't have had so many chances to gas about that battle,” he said.(320-321頁)

(公平に見て、彼は十分に負けを認めていた。当初、彼は少しうなだれているようだった。しかし、自分の行為への注意が非公式のものだとわかった時、彼は突然、大笑いを始めた。「私が腹立たしいのは、上院議員として船上で選挙活動するという愉快的時間を過ごせずに、従軍記者になりすまして、大尉殿、お前を英雄だ何だと宣伝し続けたことだ。こんなことになるなんて知ってさえいれば、お前が昔の戦いのことで大嘘をつく機会はそうはなかったのにな。」彼は言った。)

拉佛鈴色如死灰。強爲笑悦之状。言曰：“在舟中時。未嘗語君以議員。但云爲報館訪事之人。吾實不知君之神智。居然能得此篋。”(37頁)

(拉佛鈴は顔色を失ったが、無理に笑顔を作って言った。「船上ではお前に議員を名乗らず、新聞社の特派員だと言っていた。お前がこんなに頭がいいとは全く知らなかった。なんと箱を取り返したとは。」)

原作は、議員による負け惜しみの憎まれ口で、主人公をけなしている。一方、中国語訳は、議員による主人公への称賛になってしまった。不必要な改訳に思える。

3 - 5 < 教皇宮内密室 >

原作は、『Perils of the Red Box』 「Peril The Alcove Room at the Vatican」で

ある。あらすじを紹介する。

私(Melgund)は、外交文書を持ち、バチカンを訪れていた。文書は法王か外交担当の Rampolla 枢機卿に手渡すよう厳命されていた。門番から枢機卿の秘書 Antonio 神父の部屋を教えられ、訪ねると、枢機卿は重病で面会できないので、代わりに私が受け取ると言われる。私は、直接渡すので、どのくらい待たばいいかと尋ね返した。彼は確認してくると言い、席をはずす。5分後、目の怖い年配の高僧が部屋に入ってきた。私はアイルランド産で、カトリックなので、恭しく起立した。誰かと尋ねられたので、名と来た目的を答えると、「Good! 」と言われた。高僧は部屋を出ていった。Antonio が戻り、枢機卿がよくなっていれば会えるので、今晚6時に再訪するよう言われ、枢機卿の住居を教えられる。

時間をつぶすためにイギリス大使館に行くと、旧知の Peters に出会った。彼と昼食を共にし、偶然、Rampolla の話が出た。彼は、昨朝、Rampolla が出歩いているのを見かけたと言った。Peters は先に店を出、私は残っていた。そこに、背の低い男が現れ、私の赤い箱に目をつけ、話しかけてきた。男は頼まれたと言って、手紙を渡した。それは、Millicent Ambrose からで、私の今回の任務に関する件で、すぐに会いに来てくれとのことだった。彼女とは以前に付き合いがあり、今はスペインの Don Carlos の支持者である Ambrose 卿の妻であった。なぜ私がローマにいることを知っているのかといぶかりつつ、その住所に向かった。屋敷に着き、彼女の部屋に招じ入れられ、私が手紙の内容について切り出すと、彼女は、すべては話せないで、それを察しながら自分の身を守る方法を考えるよう言って、話し始めた。1か月前、ローマに来たのは、夫が Don Carlos のスペイン王位継承を支援するためである；スペインとアメリカとの関係悪化がその根底にあり、バチカンの枢機卿会内でも、Don Carlos にチャンスを与えるためにスペインが戦争に巻き込まれることを望む派と、現王朝のためにスペインが譲歩し平和を保とうとする派とに分かれている；夫たちの話から、私が運んでいる文書は、法王がスペインとアメリカとの仲裁に立つのを提案するもので、これが Rampolla に渡るのを Don Carlos 支持派は望んでいない；とのことだった。それ以上は、逆に夫を危険にさらすことになるかも知れないと言って、言葉を濁した。そして、Rampolla の写真を私に見せ(見たことがない人物だった)、更に、今晚、バチカンで案内される部屋の片側にある小部屋には決して入ってはいけないと言った。これ以上、彼女からは何も聞き出せなか

ったので、私は退室した。通りに面したドアの所で、Ambrose 卿が誰かと話しているのが見えた。近づくと、話の最後が「髪の毛一本、彼を傷つけてはいけない、もしそうなれば、この運動から手を引く」と聞こえ、相手は Antonio 神父だった。ドアが閉まり、卿と会い、Millicent とのことはばれないように、ローマにいる理由や卿がここにいることを Peters から聞き、表敬のため訪れた等と話した。赤い箱の中身を知りたがる卿を、疑われないようやり過ごし、屋敷を辞去した。

6時には Antonio 神父に教えられた住居の前に立っていた。すれ違った門番は朝と異なり、人相が悪かった。ノックして部屋から出て来たのは、神父ではなく、太った使用人で、門番同様に近寄りたが外見だった。男に案内され、部屋の前に着いた。中からは話し声らしき音が聞こえていたが、我々の到着と同時に止んだ。その後、鉄のシャッターが動く音がした。部屋に入ると、使用人は退出した。薄暗い部屋には、朝に会った目の怖い年配の高僧がいた。彼は文書を渡すよう言ったが、Millicent から見せられた写真とは違う人だったので、丁重に断った。彼は、Ferretaro 枢機卿と名乗り、法王の身の回りのお世話をする責任者だと言い、外交担当が不在の場合、その職務に自分より適した者がいますかと言った。丁重に断ろうとした時、彼の後ろに小部屋があることに気付いた。ただ、私を小部屋に入れるには、枢機卿を押しつけねばならず、枢機卿とは年齢差・体格差もあるので、不安にはならなかった。そこに、突然、小部屋のカーテンの後ろから、剣を持った男が飛び出てきた。男は Antonio で、枢機卿に向かっていった。私は枢機卿を助けるため、間に割って入り、男の腕をつかもうとした。だが、それは空振りに終わり、男は小部屋の反対側へ身をかわした。私が軍隊で訓練を受けていてよかったと思った時、頭上から鉄のシャッターが下りてきた。彼らの計略にはまり、小部屋に入っていたのだった。私はとっさに枢機卿の服の襟をつかみ、小部屋に引っ張り込んだ。

暗闇の中、足元に倒れている枢機卿に向かって、この結末はどうなるのか、あなたの助手が機械を動かして我々を出してくれるのか等と尋ねた。枢機卿は「あなたはもう死ぬのだから、告解をするならばしなさい。私は赦しを得ないで死なねばならない」等と言い、私をぞっとさせた。更に、5分以内に床が開いて底無しの井戸に落ちることになる、この装置は扱いにくく、離れた所にあるので、外にいる者は間に合わないだろう等と言った。この計略について少し話し、しばらくの沈黙の後、私はやけ気味に枢機卿をけとばし、暴言を浴びせた。その時、大きな音がしてシャッターが開いた。私は枢機卿を小部屋の外へ放り出し、自分も飛び出た。外には

Antonio らがいた。少し時間が経ち、Ferretaro は回復し、目を私の顔から赤い箱、そして周りの従者へと向けた。私はその考えを察し、ドアの方へ進んだ。枢機卿は私の心を読んだかのように、「彼らの助けがあれば、まだ目的を遂げられるかも知れない。だが、行きなさい。今日我々は共に地獄の門のそばまで行った、私はもうこれ以上罪業を重ねるつもりは無い」と声を震わせて言った。

利益のためには手段を選ばぬ聖職者や床全体が落とし穴になる小部屋が現れるサスペンスである。枢機卿をそのからくり小部屋に引っ張り込むという展開は意外で面白いと感じた。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Rampolla	鸞剖拉
Antonio	安吞禮
Millicent	美利森
Ambrose	安不路司
Ferretaro	忽雷他魯
Vatican	教皇宮

内容については、後半に省略が多いことが言える。省略したためにつじつまが合わなくなった個所を挙げる。枢機卿に向かって Antonio が飛び込んでくる場面である。

In an instant all thought of Lady Ambrose's warning was blotted from my mind, and with it all heed for the clashing schemes of these intriguing Churchmen. It is true that there flashed across me the words which I had heard Lord Ambrose use to the private secretary, "Not a hair of his head must be hurt," words which seemed now to apply to Ferretaro instead of to myself. But that mattered nothing; the thought was gone as soon as it crossed my brain; all that concerned me then was to fling myself between the unconscious victim and the impending knife.

With a cry of warning to Cardinal Ferretaro I sprang forward, and rushing past the table clutched for Antonio's upraised arm. But my grasp met nothing but empty air. For, swinging lissomely aside, the young priest eluded me like an eel, and dashed round to the other side of the recess, whence he darted into the room without any attempt to strike the cardinal as he sped by. I was beginning to congratulate myself on the effect of a martial bearing on the clerical mind when a metallic rattle above my head caused me to look up. I comprehended in an instant. I had transgressed into the alcove, and coming swiftly down from the ceiling was an iron screen which in two seconds would wall me up. All too late I saw through the ruse by which the wily cardinal, in collusion with his opponent's secretary, had planned to get me and the red box into his power.

There was no time to weigh chances, nor can I analyze the motives that led me to select one of the two open to me to try to quit the alcove before the shutter reached the floor, or to force Ferretaro to share whatever fate he had prepared for me. Be the lightning-flash of argument that moved me what it may, I chose the latter course, and stretching out my hand for the neck of the cardinal's cassock I snatched him into the alcove just in time to save him from being guillotined by the edge of the descending shutter.(344-345頁)

(その瞬間、Ambrose 夫人の警告がすっかり心から消え去り、それと共に、すべてが、陰謀をめぐらす聖職者たちのぶつかりあう策略への注意に向けられた。Ambrose 卿が個人秘書に託した「髪の毛一本傷つけてはいけない」という言葉は、今は私ではなく、Ferretaro に対してのことだったのかと思えたが、その言葉が確かに私の脳裏をかすめた。しかし、それは重要ではなく、頭をかすめると同時に過ぎ去った。その時、私の頭は、気付いていない犠牲者と襲いかかるナイフとの間に身を投ずることによっていっぱいだった。

Ferretaro 枢機卿への警告の叫びと共に前に飛び出し、Antonio の振りかざした腕をつかもうとテーブルを越えて突進した。だが私の手は空をつかんだだけだった。なぜなら、その若い司祭はさっと横に動き、ウナギのように私をかわし、小部屋のもう一方へ飛び込んだからである。そこから彼は枢機卿を襲おうともせず、急ぐように部屋に突進した。私が、軍人の身のこなしがうまくいったと聖職者のような心で喜ぼうとした時、頭上で金属のガラガラする音が鳴り、

上を向いた。その瞬間、はっと気付いた。私は境界を越え、小部屋に入っていたのだ。天井から急に下りてきたのは鉄の幕で、2~3秒で私は閉じ込められるのだ。ずる賢い枢機卿が、敵側の秘書と共謀し、私と赤い箱を得るために立てた策略だとわかったが、すべては遅すぎた。

何かするチャンスを深く考える時間は無く、私に残された2つの方法のうち、1つをなぜ選ぶのか分析することもできなかった、2つの方法とは、シャッターが床につく前に小部屋からの脱出を試みることと、私に用意されていた運命をどんな形であれ Ferretaro と無理やり分かち合うことだった。私をその行動へと駆り立てる理由が稲妻のようにひらめいたのだろう、私は後者を選んだ。枢機卿の僧衣の首へと手を伸ばし、下りてくるシャッターに真っ二つにされる直前に、彼を小部屋へ引きずり込んだ。))

余大驚。竟忘美利森之言。力奔而救老人。呼曰：“主教趣避。”即力挽安吞禮之手。不令下刃。而安吞禮狂奔入室。余亦追入。入而鐵簾立下。余遂坐困此黑室之中。余方知此秘書。特設謀而陷余。然無及矣。余亦力擒此主教入內。冀與之同死。然主教入時。鐵簾尚未下也。(44頁下)

(私はびっくりして、美利森の言葉をすっかり忘れ、突進して老人を助けようとした。「枢機卿、逃げて下さい。」と叫び、すぐに安吞禮の手を引っ張り、剣を振り下ろさせないようにした。そこで、安吞禮は突進して小部屋に入った。私も追いかけて入っていった。すると鉄のシャッターがすぐに下りてきた。私はこの暗闇の部屋に閉じ込められてしまった。この秘書が謀略を仕掛け、私ははまってしまったとようやく気付いたが、もう間に合わなかった。私は無理やり枢機卿を中に引きずり込み、一緒に死んでやろうと思った。枢機卿が引きずり込まれた時、鉄のシャッターはまだ下りきっていなかった。)

原作は、主人公がナイフの盾になろうと枢機卿の後ろに回ったため、小部屋に入ってしまう、それを見た Antonio は何もせず小部屋を急いで脱け出したとなっている。しかし、中国語訳は、Antonio を追って主人公が小部屋に入ったのだが、Antonio が小部屋を出たという記述を省略しているので、小部屋には、主人公と Antonio と枢機卿の三人がいることになる。

最後に、小部屋の恐怖が直前にまで迫った場面を挙げる。

Fighting Jos Melgund of Tel-el-Kebir could have shrieked only he didn't.

Because, suddenly, relief came in a frantic desire to have a certain question answered before I died, and I spurned the cardinal with my foot.

“ Get up and tell me this, old man, ” I said. “ You have murdered me are murdering me now but how about yourself? Shall you go before your Judge guilty of suicide as well? You are killing yourself too, you see. ”

I do not believe that I intended the brutal words as a jeer, and for uttering them my excuse must be that the tension of suspense had driven me mad. For I waited for his reply with feverish eagerness. But before it came there resounded a rattling crash like overhead thunder, and the iron shutter rolled up.(349-350頁)

(Tel-el-Kebir の戦士 Jos Melgund が悲鳴を上げたくなかった、だがそうしなかった。

なぜなら、突然、自分が死ぬ前に、ある質問に答えさせたいという狂乱した欲求に救いを見出したからであった。私は枢機卿をけとばした。

「老人、立って私に教えてくれ」私は言った。「あんたは私を殺した 殺そうとしている でも、あんた自身についてはどうなんだ？最後の審判の前に自殺の罪まで犯す気なのか？あんたは自分も殺そうとしてるんだよ。」

私はからかうために残酷な言葉にしたのではない、そんな言葉を発してしまったことへの申し開きは、どうなるかわからないという緊張感が確実に私を狂気へと駆り立てていたということだ。それは、私が熱狂的なほど彼の回答を渴望していたことからわかる。しかし、答が帰ってくる前に、頭上でガラガラという雷のような音が鳴り響き、鉄のシャッターが上がっていった。)

余即以足蹴之令起。曰：“汝今害我。我下。汝亦必従。又奚樂也。”余聲響甚。方待其答詞。忽聞頂上之響如雷。鐵簾立揭。(45頁下-46頁)

(そこで私は枢機卿をけとばし、起き上がらせて、言った「あんたは今、私を殺そうとしている。私が落ちれば、あんたも絶対に後についてくるんですよ。一体何が楽しいんだ。」私の声はとてもよく響いた。彼の答を待っていると、突然、頭上から雷のような音が聞こえてきた。鉄のシャッターがさっと上がっていった。)

原作は、主人公の混乱する感情を細かく描写し、尊敬すべき高位聖職者へ[殺人+自殺]の罪について詰問する様子を描き、近づく死への恐怖に信仰が大きく揺らぐ狂気を加えている。一方、中国語訳は、感情が略され、宗教色が薄められ、信者と聖職者ではなく、単にやけになった男と責められる男二人の話になっている。

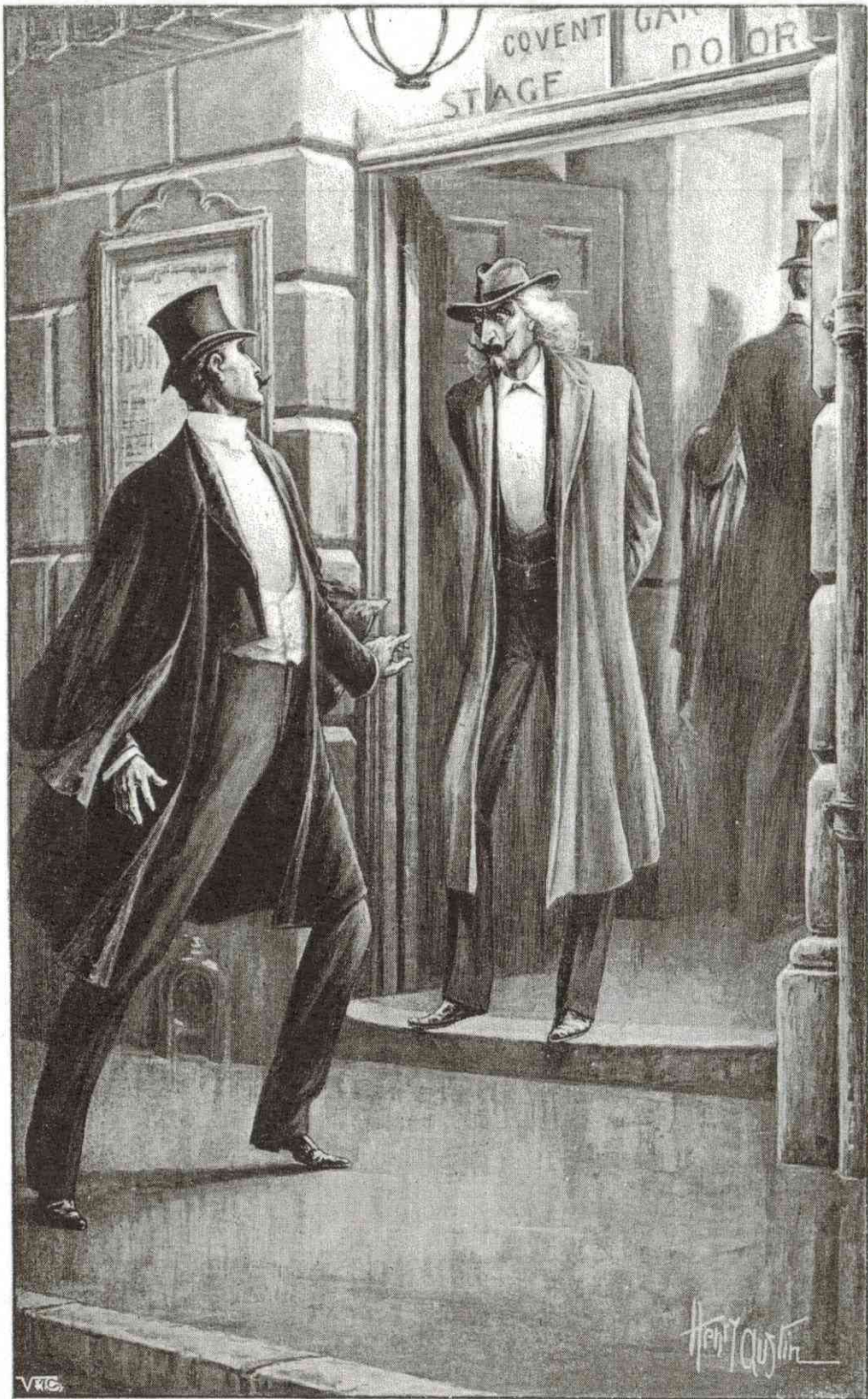
3 - 6 <伊魯馬女優>

原作は、『Perils of the Red Box』 「Peril The Morgnatic Bride」である。あらすじを紹介する。

7月のある晩、私(Melgund)はイタリアのオペラを見に行こうとしていた。盛夏の時期は、外交活動は小休止といった状態なのである。しかし、緊急に外務省に呼び出された。首相はおらず、次官の表情も少し緩んでいたもので、深刻な用件ではないと思った。用件は、Lippe-Steinfurth の大公に、ある高貴な方からの私信に近い文書を届けるというもので、その内容は恐らく、ロンドンにいる大公の息子とオペラ歌手の Ilma Fejervary との結婚を止めさせるよう諭すものらしかった。私は、その歌手とは1か月前に知り合っており、その魅力に興味を引かれ、その歌を聞き、その顔を見るために劇場に行くようになっていた。この日、見に行く予定だったオペラも彼女が出演するものだった。一方、大公の息子、Prince Adolphus はロンドン滞在中、遊びまわって、醜聞も多く、私は2人の結婚の話にショックを受けた。私の表情を察した次官は詳細を語ってくれた。この話は、結婚登記係が外務省に知らせてきたもので、その場には2人と彼女の父、Fejervary 伯爵らしき人もおり、父が止めるのも聞かず、彼女は手続をしたそうである。そして、彼女は上流階級に気に入られていたので、外務大臣から皇室の方に伝えられ、この手紙が書かれたということであった。

手紙を受け取って帰宅し、赤い箱を持って駅に向かった。しかし、列車はすでに発車しており、次は翌朝だった。この遅れがどう影響するのか心配しつつ、帰宅した。その後、ふとオペラを見に行く気になり、私の任務が失敗すれば、Ilma Fejervary の歌を聞くのも最後になるのだという思いが私を更に促した。

上演の途中で入場したが、彼女の歌声を聞き、微妙な変化に気付いた。彼女の動きが前より自由さや自らの感情を失っているようだった。このことは何週間も彼女



"I swerved like a frightened colt."

を研究してきた私だからわかった。席に着くと、彼女の目がしばしば客席の方に動いているのに気付いた。その客席をオペラグラスで観察すると、Prince Adolphus ともう1人、Fejervary 伯爵らしき人物が座っていた。伯爵は時々、Prince の肩を叩きながら話をしていた。その動きからすぐれた騎士であることは想像できたが、顔は Ilma とは全く似ていなかった。その男の目は燃えるように輝き、常に Ilma を凝視していたが、彼女が舞台から下りると、凝視を止め、緊張を解かれたかのようにあくびをしていた。

2人に注目するうちに上演は終わった。まだ時間があるので、2人を尾行することにした。玄関ホールに先回りすると、すぐに2人が現れ、馬車に乗らず、歩いて外に出、ぐるっと回って、出演者用の入口に入っていった。私はその前を通り過ぎた時、2人は守衛と話をしていた。少し進み、引き返して再びその前を通り過ぎた時は、伯爵がドアの所に立ち、通りの方を見ていた。その目は燃えるように輝き、目を合わせると、自分の脳を錐で貫かれたような感じがし、よろめいてしまうほどだった。少し進み、もう一度引き返そうか考え、男の目の怖さに躊躇していた時、馬車が入口に着いた。2人と Ilma が乗り込んで出発した。私も馬車を捕まえ、後を追った。馬車は Ilma の住むマンションへと向かった。

マンション前に着き、Prince は Ilma の手を引いて建物の中へ入っていったが、伯爵は尾行を知っているかのように少し前を歩いてから入っていった。私が入ると、エレベーターがすでに動いていた。階段を上がり、3人を追った。Ilma が部屋の鍵を開け、2人を招き入れると、最後にドアを閉めた。幸い閉め方が弱かったため、掛け金が掛からなかった。私はドアまで進み、玄関から声が聞こえなくなると、思い切って中に入った。左側の部屋(食堂)から男2人の声が聞こえてきた。内容は専ら Ilma にかけて催眠術のことで、伯爵は、彼女はすぐに術が解けてしまうので、被術者としてはあまりよくない等と話し、Prince は、術の効果が消えても必ず彼女を飼い慣らしてやる等と話していた。ここで、私は状況が全く変わってしまったと認識し、特に、結婚が明日行なわれるので、今日 Lippe-Steinfurth に出発していたとしても任務は失敗しただろうということ、違法な手段で Ilma が結婚に同意させられていること、がはっきりとわかった。数時間以内に彼女の催眠術を解かなければと考えていた所、2人の会話から、今いるのは3人だけだと聞こえてきた。私は、誰が出てきても見つからないように、そこにあった等身大の騎士像の後ろに隠れた。その像には電灯が付けられていた。電線を切り部屋中を真っ暗にすれば、

伯爵の目も見えなくなるし、何とかなるのではないかと思い、上に線が集まっている所があったので、像の後ろから移動し、持っていたニッパーで切断した。すぐに真っ暗になり、伯爵と Prince が修理を呼ぶために外へ出て行った。私は食堂に入っていた。

その後、私の部屋には私と Ilma と次官がいた。食堂に進んだ後は、マンションを離れるよう彼女を説得し、別の出入口から彼女を連れ出し、安全な私の部屋に来たのだった。正気に戻った彼女の話では、男は彼女の父 = 伯爵でも何でもなく、Prince が雇った催眠術師ということだった。男は2週間前に現れ、彼女に術をかけ、父だと信じ込ませ、自由を奪ったのだった。こうして彼女に求愛を断られた Prince の下等な陰謀が判明した。

私は彼女に求愛し、2人は結婚することになった。そして、行き損ねた今回の配達で、私が赤い箱を持つ最後となった。私は次官から辞職を勧告されたのである。

催眠術をかけられ、結婚を強要された歌姫を、間一髪の所で悪漢どもから救い出し、自分の配偶者にしてしまうという冒険ロマンスで、それを無理やり Queen's Messenger に結び付けたような物語である。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Ilma	伊魯馬
Adolphus	亞多羅福司
Fejervary	輝則白雷

タイトルが、原作の「The Morgannatic Bride」(貴賤相婚の花嫁)に対し、中国語訳は“伊魯馬女優”(女優伊魯馬)としている。わかりやすく改めたのであろう。

内容については、省略が多いことが言え、全体に渡って圧縮している。

誤りを一例挙げる。主人公が劇場を出て、2人を尾行する場面である。

To my great satisfaction, instead of waiting for a carriage, which would have made it extremely difficult for me to follow them, they left the theatre on foot, and so gave me the chance to slip out in their wake. As I had more than half expected,

they only went slowly round the corner to the private door used by the chief professionals, and disappeared within.(365-366頁)

(大変喜ばしいことに、馬車を待たずに もし馬車に乗ると、彼らを尾行するのが極めて困難になっただろう 2人は歩いて劇場を出た、そこで私に2人の後をそっとつける機会が与えられた。ある程度期待していたよりも、2人はゆっくりと角を曲がり、主役級に使われている専用入口に行き、その中に姿を消した。)

乃不御車而歩行。余則潛蹤躡其後。乃其行甚慢。甫一轉。即至一人家。徐徐同入。(50頁下)

(そして(2人は)馬車を使わず歩いた。私はこっそりとその後をつけた。かなりゆっくりと歩き、角を曲がった所で、ある家に着き、ゆっくりと入っていった。)

原作の「the private door」は劇場の一部で、人家ではない。
次に、改訳を一例挙げる。Ilma 救出後の場面である。

“ Wouldn't it be better to win the lady's hand yourself? ” The chaffing words of the Under-Secretary recurred to me as I sat opposite to Ilma Fejervary in my chambers in the Albany. After persuading her to leave the mansions with me by another exit I had taken her to my own rooms, as the only place where she would be safe from her father's influence. And now that for two short hours she had been free from the bidding of those baleful eyes she had just told me that he was not her father at all. The “ Count ” was no more, no less, than a professional hypnotist whom Prince Adolphus of Lippe-Steinfurth had hired for his purpose.(376頁)

(「やっぱり自分で彼女の手を引っ張ってくる方がよかったんだね？」次官のひやかしが私に向かって繰り返された、その時、私は Albany の自分の部屋で Ilma Fejervary の向かいに座っていた。別の出口から一緒にこの家を出ようと彼女を説得した後、私は自分の部屋まで彼女を連れて来た、ここは彼女が父親の影響から逃れられる唯一の場所だった。そして今、わずか2時間で彼女はあの有害な目による命令から解き放たれ、あの男は父親でも何でもないと私に

話してくれている所だった。「伯爵」は全くただのプロの催眠術師で、Lippe-Steinfurth の Prince Adolphus が自分の目的のために雇った男だった。)

呼伊魯馬曰：“汝勿嫁僉人。勿墜邪術。是間有別門否。”此時伊魯馬。似悟知爲催眠術所困。亦不問余爲何人。即隨余自開一小門。循梯而下。余引之走出街心。覓得原車。至余之寓。此時已漸漸警覺。蓋輝則白雷非其父。爲專擅催眠術之人。亞多羅福司以多金餌之。使爲己用。(52頁下)

(伊魯馬を呼んで「君は悪人に嫁いではいけない、いやらしい術にはまってはいけないんだ。ここに他の出入口はありますか。」この時、伊魯馬は催眠術にかけられていることがわかったようで、私が何者なのかも聞かず、すぐに私について小さなドアを開け階段を下りた。私は彼女を連れて街中に出、乗ってきた馬車を捜した。私の家に着いた時、ようやく意識がはっきりしてきた。輝則白雷は父親ではなく、専門の催眠術師で、亞多羅福司が大金で雇い、自分の目的のために使っていたのであった。)

原作は、救出の様子をふり返る形でごくごく簡単に述べている。次官の台詞は、主人公が今回の任務を始める前に言われたひやかしと全く同じもの(358頁)である。一方、中国語訳は、次官は登場せず、救出の様子を加筆して細かく描いている。蛇足のような気がするが、訳者には原作の記述スタイルが気に入らなかったのであろう。

作品の最後の部分を挙げておく。この台詞を話す次官の表情は述べられていないが、冒頭の次官の描写から、ひやかし半分で少し嫌味も込めて話していたのだろうと推測できる。

“After this you are impossible as a Queen's Messenger, Melgund, and had better resign,” the Under-Secretary said at our next interview. “We like red tape at the Foreign Office, and you ought to have gone to Lippe-Steinfurth.” (378頁)

(「こんなことの後では、君は Queen's Messenger として勤められない、Melgund、もう辞職すべきだ」次に会った時、次官は言った「我々外務省は公文書を扱う所で、君は Lippe-Steinfurth に行っておくべきだったのだ。」)

及見外交秘書。秘書曰：“爾既得美人爲偶。可以勿再爲郵員矣。”(53頁)

(外務省の秘書に会った時、秘書は言った「もう君は美人と結婚したのだから、再び配達員になる必要はない。」)

3 - 7

原作は、移動手段がそれほど発達していない時代に、各国間を走り回る文書配達係の冒険を描き、異性との交遊がとにかく広いという主人公の特徴がよく表れている各篇であった。

中国語訳は省略が多いように思えたが、『Seaward for the Foe』各篇の翻訳よりは省略が少ないように感じた。やはり原作の順(『Seaward for the Foe』 『Perils of the Red Box』)とは逆に、《紅篋記》を前面に据え、『Seaward for the Foe』各篇の翻訳を後にしただけのことはあるようだ*2。

4

90年以上前に発表され、原作不明のままだった林訳小説の原作を明らかにできた*3。また、原作との比較により、物語に忠実に、簡潔を旨とする翻訳姿勢も明らかになった。原作者 Headon Hill*4及び原作『Seaward for the Foe』、『Perils of the Red Box』すべて現在ではあまり知られておらず、林訳の幅広さに改めて感心させられる。



【注】

- 1) 本訳は固有名詞の不統一が他に2か所見える。Flushing 佛格興(23頁上),佛拉興(23頁下)、Petersburg 森彼得堡(27頁下),聖彼得堡(その他)
- 2) ページ番号も通し番号で、1篇目の〈英國下哀底美敦書於法國〉は1-10頁で、6篇目の〈伊魯馬女優〉は47-53頁のようになっている。
- 3) 余談であるが、原作にたどり着いた過程を記してみる。まず中国語訳の“希登希路”を見て、すぐに「ヘドン・ヒル(Headon Hill)」だと気付いたので、その著作で《紅篋記》に一致するものを捜すと、『Perils of the Red Box』が見つかり、『Seaward for the Foe』と合本になっていることがわかった。そして、本を入手して確認しただけである。
- 4) Headon Hill の作品の最初の日本語訳は、管見の及ぶ限りでは、短篇『老水夫

の死』(田中早苗訳、『新青年』第6巻第2号,博文館,1925.1.10,掲載)である。但し、原作は未詳。

【参考文献・ホームページ(HP)】

井上十吉(森下生訳)「著名なる探偵小説家と其作品」 - 『新青年』第3巻第3号(博文館,1922年2月10日)所収

延原謙「歐米探偵作家著作目録」 - 『新青年』第7巻第3号(博文館,1926年2月10日)所収

Dr.James Kennedy、W.A.Smith、A.F.Johnson 『Dictionary of Anonymous and Pseudonymous English Literature』Volume7,Oliver and Boyd,1934年

William G. Contento 管理 HP 「The FictionMags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2010年6月23日確認)

(わたなべ ひろし)